

Title	ガリヤ戦記の製作年代に就いて
Sub Title	
Author	近山, 金次(Chikayama, Kinji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1933
Jtitle	史学 Vol.12, No.1 (1933. 4) ,p.89- 104
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19330400-0089

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ガリヤ戦記の製作年代に就いて

近 山 金 次

ガリヤ戦記 *Commentarii de Bello Gallico* の製作年代如何と其に伴つて必然的に起つて参ります。此書の史的價値の問題に多少觸れて見たいと思ひます。

ケーザル *Caesar* のガリヤ戦記は 58 B.C. から 51 B.C. にかけて行はれました。ローマ軍のガリヤ遠征を記した書物であります。前後八年間に亘つて行はれました。此大事業の記録は一年毎に巻を新にし全部で八巻あるわけであります。所が實際ケーザルが筆を執つて書きましたのは前の七巻でありまして、最後の一卷だけは彼の忠實な部下であったヒルチウス *Hirtius* なるものが書いて居るの

ガリヤ戦記の製作年代に就いて (近山)

であります。何故ケーザルが最後の巻を執筆せず終つたものか何等これを説明するに足るべき證據資料を發見致さないのであります。ケーザルの遠征の目的は大體 52 B.C. に於けるアレジア *Alesia* の決戦を以て終りを告げるのであります。して、次の 51 B.C. は事實上奪るガリヤに於ける匪賊の討伐と言つた觀を呈したのであります。から、たとへケーザルが此處で擱筆致しましたといへ、ガリヤ戦争を描いた書としての價値は少しも損はれて居らないのであります。従つて之が一つの書物として世に出ましたのも、前の七巻だけが先づ最初でありまして、後の第八巻はケーザル

(八九)

八九

の死後ヒルチウスにより書かれ其が本書に添付されたのであります。之が現存するガリヤ戦記の原型であります。

ケーザルがガリヤ戦記の筆者であると言ふことはこの幾世紀かを通じて何等疑念を挟む餘地の無いものとして公認されて來たのであります。最近になりまして、もつとも最近とは申しませんが、之は二十世紀になつてと言ふ意味であります。ドイツの歴史家の或もの例へばマックス・ストラック Max Strack やフォーゲル F. Vogel の如きが揣摩憶測をたくましくして、此ケーザル、ヒルチウスの筆者説をくつがへさうとした事がありました。しかしながら單なる推論に過ぎなかつた彼等の説は結局また其とは反對の立場からなされる單なる推論によつて幾らでも覆へされるべきものでありましたからして、史學的には殆んど價值無きものとして葬り去られたのであります。けれども是等を單に理由無き妄説として葬り去ることは

極めて容易であります。他面さう言ふ妄説が起り得るほど從來の通説なるものがその内容に於て極めて不完全なものであつたことを注目せねばならぬのであります。

御承知の如くケーザルは 44 B.C. の三月に元老院で殺されました。ガリヤ戦記がケーザルの筆になる以上、之より前に記されたことは間違ありません。しかるに此書のことの評判に上つてゐるキクロ Cicero のブルッス Brutus (ch. 75) は 46 B.C. に世に出てゐるのでありますから、時代は更にもう二年遡り得るわけであります。それ故ガリヤ戦記の製作年代は最も廣範圍に見ても 58 B.C. から 46 B.C. までの十三年間に置かるるわけであります。

ケーザルが此書を記したのは一般に 52 B.C. の第七戦役直後のことであらうと言ふのが通説であります。この立場を最も公平に裏書してゐるのは、かのローマ史の大家テオドル・モンゼン Theodor

for Mommsen であります。彼はローマ史第五卷十二章の所で文學を論じ、たま／＼此書に言及致しまして「ケーザルの少くとも形式上では合法的ならざる企劃、即ち廣大な國土を征服し、能力ある當局の指令を待たずして絶えずその軍兵を増加せし事に對して公衆の前に出来る限り辨明をなす」目的から書かれたものとし、即ち51 B.C. ローマに於てケーザル反對の論議が湧き立ち、輿論が彼の武装解除、即時歸國に傾いてゐた折に執筆され、世に出たものと見てゐるのであります。つまりモンゼンに従へば之は飽くまで辨明の書なのであります。従つてケーザルが辨明を最も必要とした51 B.C.に執筆されたものと見るわけでありませう。此書の目的を辨明なりとした彼の論說の特徴は、一般歴史家に影響を與へまして、彼等の論說の方向を形付ける要素ともなつて居りますので、特に記憶して置かねばならぬ點であります。先づ常識から見てケーザルが極めて多忙でありま

ガリヤ戰記の製作年代に就いて(近山)

した内亂時代には到底、執筆の餘暇は無かつたらうと推察されます。それからもう一つ、之はモンゼンが此書の目的を辨明なりとする論法より生れたものであります。ケーザルは此書の第七卷六節で52 B.C.に於けるポンペイウスの異常法令を認容し且つ之に感謝して居るのであります。之はポンペイウスを敵として行動せねばならなかつた内亂時代には、此書の目的性質から見て不可能な事のように思はれると言ふのであります。そこでケーザルがルビコン河を渡つたのは49 B.C.の春まだ浅い頃でありますから、此書の出現は何うしても51 B.C.か50 B.C.かの何れかにあてらるべきものとなるのであります。所で此書を飽くまで辨明の書であると思つたモンゼンはその議論の性質上進んで之を51 B.C.の春に置いたものと思はれるのであります。つまり前にも申し上げました様にローマの元老院に於てケーザルの任期間題が激論され、マルケルス M. Marcellus の痛烈なる攻撃

があつたのに對して採られた反對運動の一つであつたと見るのでありまして、52 B.C.の冬から51 B.C.の春にかけて書かれたものと推定するのであります。では之より更に前に書かれたことは無いか、即ちガリヤ戦争中に書いたことは無いか、此書が各年毎に卷を改めてゐる事からしても毎年の終に書かれたものでは無いか、と云ふ疑問の方に對しましては、先づ第一に此書の第八卷序文に於けるヒルチウスの言葉、即ちケーザルが之を極めて速に而も容易に書き上げた事を驚嘆してゐる言葉がありますが、實際吾々が之を讀んで見ましてもその統一された文脈からは確かにまゝとめて書き上げられたものであると言ふ印象を受けるのであります。それにまた此説を傍證するものとして此書の中に出てくる Boii の記事に就ても其を見る事が出來ます。即ち第一卷二十八節でケーザルは Helvetii 戦争の結果 Aedui に服屬することとなつた Boii の記事を記してゐる際、この Boii

は後日 Aedui のもの等と同じ權利、同じ自由を與へられたと言つて居りますが、斯かる記述はケーザルが豫言を書いたと思はれない以上、何うしても數年後のものと思なければならぬ事情にあるのであります。且つまた十九世紀初頭に於けるケーザル研究者として命名のあつたシュナイダー及び Heider は次の如く言つて居ります。「もしケーザルがガリヤ戦争の七年間に彼のガリヤ戦記を書いてゐたものとすれば、キケロは自分の兄のキンツス Quintus や親友のトレバチウス Trebatius がケーザルの陣中にゐたし、尙ほ且つキケロ自身もケーザルと文通し合つてゐた關係上その事實を看過するわけが無いし、また其を承知してゐながら發表しない様なことがあつたとは思はれない」と言つて居ります。之はもつともな議論であると思はれます。兎も角、前にも申し上げました様にガリヤ戦記第八卷の筆者であるヒルチウスはその序文に於て「われ等は次の點で他の人達よりも一層威

嘆おくあたはざるものがある。即ち世の人々は此書が如何に精妙且つ瓊瑤なきものなるかを知るけれども、我等は更にまたケーザルが之を如何に容易に且つ神速に書き上げたかを知るが故である」(VIII. prep. *Quis tamen rei maior nostra quam reliquorum est admiratio: ceteri enim quam bene atque emendate, nos etiam quam facile atque ce-leriter eos perfecit scimus*) と言ふ言葉を洩し居りますこと、實際に於てケーザルが第七戦役までしか書いて居らぬ事實などから推しまして、この第七戦役の直後即ち52 B.C.の冬から51 B.C.の春にかけて書かれたものだとする此説は最も穩當なものであらうと思はれるのであります。廣く一般に行はれて居ります此説は他にさしたる反證の現はれぬ限り、ヒルチウスの言葉とケーザルの第七卷に於ける擱筆の事實とによつて公平なる論者からは支持さるべきものであります。他面この結論に到達するまでの各人各説には、かな

ガリヤ戦記の製作年代に就いて(近山)

りの不純なる分子が包含されてゐることを認めぬわけには行かぬのであります。先づ第一に彼のモンゼンは此書を以て飽くまで自己辨明の書なりとなす立場から51 B.C.に於けるローマの輿論にそなへることを以て此書の主要なる目的に數へて居ります。自己辨明の書であるとする此立場は當時のローマの情勢と、筆者のケーザルがその大立物であつたと言ふ事情からして極めて常識的に編み出された立場であるに止まらず、之はまた歴史的にも若干、裏書せられて居るものであります。と申しますのは共和政末期の溷沌たるローマ社會の中にありまして、少くとも筆を執ることの出來た政治家と云ふものは大抵、自己辨明の辭句を弄したのであります。たとへ自分自身、筆を執ることが出來なくとも、筆生を傭つて之に代筆させると言ふのが通例でありました。例へば彼のマリウスと雌雄を争つたスラは政界を引退した後 *Com-mentarii Rerum Gestarum* と言ふお伽噺の様な歴

(三)

史を書いて居ります。但し之を本氣で眞に受ける勇氣のあつたのはプリニウス位のものでありました。それからまたルクルス Lucullus も同じ意味からマリウス戦役の歴史を書きました。ケーザルの敵役であつたポンペイウスは文才を有つて居らなかつたので、自畫自讚の歴史を書かせるためヴァロー Varro なるものを備つて居りました。こう言ふ目的の爲にギリシャの書記生が益んに用ひられてゐたのであります。それ故ケーザルも彼の畢生の大事業であり、最大の名譽でもあつたガリア戦争を巧に彩色して、自己の政界に於ける地位を有利ならしめる手段に用ひたものであらうとする此説の出現には何等の無理もないわけであります。そして若し事實が此説の如くであつたとしたならば、ケーザルの書は當時、社會的に價値があつたゞけ、換言致しますれば、うそいつはりの多い際物であつたゞけ、それだけまた歴史的には價値の少いものとなつてくるのであります。と

ころが妙なことにケーザルの書は内容に於ても事實に於ても全く之を正反對の事情を物語つて居るのであります。先づ第一、ケーザルの書には辨解らしいところが少しも無く、簡潔明瞭な軍事的報告を以て終始一貫し其處には何等の誇張も、いさゝかの感情も交へて居らないのであります。モンゼン自身も認めた様に、確かに此書は純粹なものゝみが興へ得る明快な氣品と素朴な魅力とを兼ね備へて居るのであります。して見ると此書は辨明の書にして辨明の書にあらずと言ふ奇妙な事情に遭遇するのであります。つまりモンゼンの言ふ如く、たとへ之が辨明の目的を以て綴られたものとしても、此書は辨明の書では無かつたと言ふ妙なことになるのであります。モンゼンは飽くまでもケーザルを *Rechtfertigungsschrift* の筆者であると主張しながら、すぐその數行下では此書の有する史的眞實性を極めてほめたゞへ、之はたゞに文學に於けるのみならず、歴史の世界に於ても屈指

の書物であると斷言して居ります。之は誠に曖昧な論法であると云はなければなりません。加ふるにまた此書の目的が激しい駁論に對する辨明にあつたとすれば事實上この書は失敗の書であつたと言はなければならぬのであります。と申しますのは49 B.C.のローマ元老院はポンペイウスに引づられてケーザルの武装解除、即時歸國を嚴命して居るのであります。ケーザルが隱居でもした後と言ふなら兎に角、金力も武力も兼ね備へてゐた當時のケーザルが一つの書物にたよつて自己の立場を辨明したと見るが如きは誠に合點の行かぬ論法の様にかへられるのであります。殊にケーザルは武力でガリヤを征服し、金力でローマを征服したと言ふ評判を取つたほど實行的な男でありました。それにまたケーザルはモンゼンの見る如き、けちな男では無かつた様であります。即ち彼はガリヤ戦記の中でポンペイウスに對し友誼があつたと同様、内亂を記した内亂記 *De Bello Civili*

ガリヤ戦記の製作年代に就いて (近山)

Ⅱの中にあつてもポンペイウスに對しては極めて寛大であります。彼はポンペイウスを誹謗することによつて自己を利するが如き態度は、いさゝかも見せて居りません。此書が當時の社會の敵からも味方からも賞讃の言葉を以てむかへられ、辨明の書などが有つことの出来ない名譽を後世にまで傳へてゐるのはケーザルの態度がいさゝかの私情をも交へてゐない爲であらうかと考へられます。あまつさへ私は更に一步を進めて、何故ケーザルに辨明の必要があつたのかを尋ねて見たいとさへ思ひます。前にも申し上げました様にモンゼンは此書を評しまして「ケーザルの少くとも形式上では不合法的な企劃、即ち廣大な國を征服し、能力ある當局の指令を待たずして絶えずその軍兵を増加せし事に對して公衆の前に出来る限り辨明を「す」目的からと斷じて居りますが、之に對する面白い皮肉がケーザルの書物の中に見あたります。それは第二卷の最後に斯う云ふ記事が御座いま

(空)

す。ケーザルの報告による是等の事蹟に對して十五日間の感謝祭が決議された。それは此時まで會て何人にも與へられなかつた名譽であつた」(II.

35. *Ob easque res ex litteris Caesaris dies quindecim supplicatio decreta est, quod ante id tempus accidit nulli*)。また第四卷末には「ケーザルの報告による是等の事蹟に對して二十日間の感謝祭が元老院で決議された」(IV. 38. *His rebus gestis, ex litteris Caesaris dierum viginti supplicatio a senatu decreta est*) とあり、更に第七卷末には「是等の報告がローマで發表されるや二十日間の感謝祭が決議された」(VII. 90. *His litteris cognitiss Romae dierum xx supplicatio redditur*) とあります。して見ると、ケーザルが前代未聞の感謝祭までしてくれてゐる、然も今年それをしたばかりのローマに向つて何の爲の辨解を書かねばならなかつたものか、それは甚だ以て奇怪なる態度と言はなければならぬことになるのであります。つまり之で

は一層の人氣を得んとして書いた宣傳の書たるべきことはあり得ても、辨明の書にはなり得ぬわけでありませう。従つて辨明の書であると言ふ説は、當時の事情が如何なるものであるにもせよ、また多少考慮の餘地を残すものであるにもせよ、その重大性を認めるわけには行かぬのであります。ケーザルの研究家として最も理解の深かつたと言はれるニッパー Nipperday はこの辨明説を拒け、従つて 51 B.C. 説に重きを置かず、52 B.C. から 51 B.C. へかけての冬はケーザルにとつて第七戰役後の事務で多忙を極めたものであつたらう、其故、執筆の餘暇は得られなかつたであらうとし、51 B.C. から 50 B.C. へかけての冬に書かれたものであらうと説き、50 B.C. に世に出たものと主張して居ります。そしてケーザルが第七卷で筆を斷つてゐるのは何か急用に驅られての結果であらうと論じて居ります。しかしながら「極めて容易に而も迅速に」書いたと評してゐるヒルチウスの言

葉と思ひあはして見て、いかに急用に驅られたとは言へ、第七卷でぶつゝりと筆を斷つて而も直に世に出してゐるのは少し思ひ切りがよすぎる様に考へられます。それにまた急用に驅られたと言ふなら後日かの内亂記を書く時に之を書き上げて置くだけの配慮がケーザルに缺けてゐるのを認めねばなりません。辨明説を取らざる立場から見ても不愉快な事實と云はなければなりません。私と致しましては、やはりこの執筆を 52 B.C. から 51 B.C. にかけての冬期に置き、 51 B.C. に公表されたものと言ふ考への方が無理でなく穩當なものであらうかと考へます。けれどもモンゼンの様に 51 B.C. の元老院に備へた辨明なりと積極的立場を離れまして、たゞ其が時機から言つてもケーザルにとり有利であつたのだと言ふ消極的立場に止めて置きたいと思ひます。たゞ私が如何にも不思議に思ふことは古來のケーザル學者が誰一人として此書の第七卷に於けるケーザルの擱筆を以てケ

ーザルの意思より生れたものでは無いと見てゐることであります。ガリヤ戦争は八年間續いたのだから最後の一年間を書かずに置くと言ふことは如何にも物足りなく思はれるのでありませう。しかしながら此書が極めて *impressive* であり、高雅な文體と共に文學としても偉大なものとなつてゐるのは第七卷で擱筆されてゐるが爲であると私は信じて居ります。ともあれ第七卷まで、筆を止めた事が果してケーザルの意思より生れたものか否かは何等の證據も見あたらないのでありますから實際に於ては何れとも言ひ得ぬのが本當であります。

さて以上の如くガリヤ戦記の執筆、發行を 51 B.C. に置く在來の説は、辨明の書なりとする主張を除外すれば、最も有力にして且つ信すべき學説でありませう。しかしながら問題は決して之で解決しては居らないのであります。此説が有つ最も大きな難關はケーザルの書そのものにあるのであ

りまして何う見ても此説をそのまま、在來の型どほりに信ずるには困難な事情が餘りに多いのであります。何よりも先づ此書が歴史家でない多忙な一武將の手になるものでありながら、その内容は辨明に墮せず、宣傳に走らず、しかも眞理を語り得て「永遠の書」(eterna es veritas)となつた事は、當時の溷沌たる世情、ケーザルの地位から見つ一つの謎であります。從來の歴史家の多くは之をケーザルの天才と奇妙なる人格とに歸し、謎を謎で解決する様な立場を取つて居ります。また困難な事情と致しまして更に小さなものを申しますれば、先づ第一にケーザルの敘述は極めて簡明でありまして、問題の事件を目前にして筆を執る場合にはそれでも明瞭であるかも知れませぬが、後になつて顧る場合には不明瞭なものとなつてしまふべき様な章句が相當に多いことでもあります。例へば第七卷三十四節から五十二節までに見えますゲルゴ、ヴィヤ Ge Gorvia 攻圍の記事の如き、地勢を熟知

せざるものには解し難いものであることは萬人の認むる所であります。また第四卷二十節と第五卷十二節から十四節までとにあらはれたブリタニヤの記事を比較して見ましても、前者が餘りにも簡単なのに引かへて、後者が遙かに詳細なのからしても、之は時を同じくして書かれたもので無く、毎年その經驗する所を筆にのせて行つたものとか思はれません。それにまた彼の書中には多少の矛盾、無用なる反覆の箇所が無いでも無いのであります。例へば、よく攻撃の的となるものに Nervii の記事があります。其は何う言ふことであるかと申しますと Nervii は Belgae に於ける強大な Civitas でありましてガリヤ戦記の第五、第六兩卷でケーザルが語つて居ります記事からすれば、彼は相當これに精通してゐたと認められるにもかゝらず、彼は同じ書の第二卷二十八節では Nervii の全滅の記事を掲げまして、Nervii は六百人の元老の中僅か三名だけが生残り、六萬の軍兵

の中僅か五百人のものが残存したと言ふ報告を記して居ることでありませう。それからまたケーザルは此の書の序文に於て *Calpurnius* と *Belgae* との區別を立てガリヤの範圍を明かにして置きながら書中では之を守つてゐないのであります。一體、史學者の通癖と致しまして、この矛盾と云ふことが一番慎重に且つげう／＼しくあつかはれたのであります。是等の事情は一見極めて些細な薄弱な理由であるかの如く思はれますが、ケーザルの書を注意深く通讀したものは誰しも感せず居られぬほど底深い力があるのであります。そこで是等の感情に飽くまで忠實であつた一部の人々、例へばケーザル研究家として常に名論卓説を吐いた *Long* や、それから *Dr. Belloquet* や *F. Obermaier* や *Walther* や *E. H. Reber* 等は此書が毎年末に執筆されたものと主張するに至り、ケーラー *Köhler* の如きは前の四巻と後の三巻とは時を異にして書かれたの

ガリヤ戦記の製作年代に就いて (近山)

であらうと言ふ奇妙な二分説まで出すに至りました。けれども斯かる極端な説には危険が多いのであります。蓋し此書の中に矛盾の箇所があるからと言ふ事は決して執筆の時期を分つ理由とはならないのであります。當時極めて多忙であつたケーザルにとりましては彼自身の執筆した書物を再讀する餘暇が無かつたかもしれないのであります。兎も角、表面上ではケーザルには此書を書き終へる時日も許されなかつた事になつて居るのであります。それにまた此書の中に散見する矛盾は、たゞ複雑なる材料に對する無造作な處理、記憶の脱落、單なる不注意等の理由からしても充分説明し得るものばかりであると言つてもよいのであります。でありますから、此書に對して最初に批評がましい事を言つた *Asinius Pollio* の非難も此點にあつたのであります。彼はケーザルが不注意に材料をまとめ、眞實をよく検討してくれぬ、そして餘りに他人の言葉を信用し

過ぎる、そのため故意であるのか忘れてするのか
兎も角、間違つた事を書いてゐる、恐らく自分で
は其處を書直すか訂正するつもりであつたのだらう
と言つて居ります。このアシニウスの言葉は實際
上ガリヤ戦記に向けられたものか、或は内亂記に
向けられたものか、それともこの兩者に向けられ
たものか、スエトニウスの書物(Divus Julius.LVI)
では明かでないのでありますが、またポリオは、
ガリヤ戦争に参加して居らぬのでありますから、
之は内亂記への批評でガリヤ戦記への批評では無
からうと思はれるのであります。それでもたと
へ之がガリヤ戦記に向けられたものと假定しても
以上の様に極く軽いものとしか取り様が無いので
あります。加ふるにまた各年末に執筆されたと言
ふ説には前にも申し上げました様に Boii の記事
の難關があります。それは第一卷二十八節に見え
る次の如き記事であります。「優れた勇氣によつて
知られてゐた Boii のもの等は Aedui の願ひによ

り Aedui の領域中に定住すべき旨をケーザルは
許可した。Aedui は之に對して土地を與へ、後
に彼等が有すると同じ權利、同じ自由の状態に於
て之を受入れる様になつた」(I. 28. Boios. peten-
tibus Aeduis, quod egregia virtute erant cognitū,
ut infimibus suis collocarent, concessit; quibus illi
agros dederunt, quosque postea in parem iuris
libertatisque condicionem atque ipsi erant recep-
erunt)と言ふ記事であります。この言葉を公平に
判断すれば、たとへ此書の第一卷が戦後直に執筆
せられたとするも、後の章句は後日加へられたも
のを見なければならぬことになるのでありま
す。そして何うしてもヒルチウスの言葉と齟齬し
合ふ様なまずい結果になつてしまふのでありま
す。そもくガリヤ戦記が毎年末に書かれたもの
であらうと言ふ推測は同書の中に矛盾があるから
と言ふ様な見地よりも全く別な然もずつと有力な
立場から論ぜらるべきものなのであります。なる

ほどガリヤ戦記の文脈には一見して統一があるけれども、敘述が如何にも生彩に充ち満ちて居り、各巻が思ひ出を書き綴つたものと言ふよりも寧ろ目撃した其まゝを書きつけて行つたと言ふ様な印象を與へずに置かないのであります。單なる思ひ出の記の筆者には到底及ぶことの出来ない表現力を以て讀む者の心に迫つて來るものがあります。あれだけ緻密な記述を、あれだけ簡潔な章句に織り込んだケーザルの筆力にはたゞ感嘆の他はありません。第一卷三十九節から四十一節に見える *Germani* の噂が生んだローマ陣營内の大恐慌や、第二卷十五節から二十八節に見える *Nervi* との恐ろしい大激戦と言ふ様な記事が、第七卷を充してゐるヴェルキンゲトリクス *Vercingetorix* の動亂と並んで力強く描かれてゐるのを見ますとヒルチウスの「神速にして容易」と言ふ言葉は到底信せられないほど如何にも不思議であります。吾人はこの點に於て、何うしても改めて此書を見直さな

ガリヤ戦記の製作年代に就いて(近山)

くてはならないと思ひます。

所が此處に面白いことにガリヤ戦記の英譯者であるエドワーズ *H. J. Edwards* が次の様な新説を吐いたこととあります。彼は此書を譯讀して行く中に次の如き印象を受けたと物語つて居ります。「此書は 52 B.C. から 51 B.C. にかけて書かれ、51 B.C. の初に世に出たと言ふのが通説であるけれども世に出た時期と執筆された時期とを同一視する必要は毫も無いであらう。余の考ふる所では畢竟此書は毎年末にケーザルからローマ元老院に送付された *epistulae* つまり書信と言ふか手紙報告と言ふか兎も角さうした性質のものに序文と註譯と細説を加へた一つの普及本であり、換言すれば其名の示す如くその註解 *Commentarii* であつたのだらう」と推定して居ります。そしてケーザルがその *epistulae* を送付してゐた事實はスエトニウスも之を物語つてゐる所であると傍證し、是等を基礎にケーザルは多忙な時間をさいて此書を

まとめあげたものであらうと述べて居ります。ケーザルが元老院に對する手紙報告の記事はケーザル自らも記して居り、スエトニウスによれば之が相當詳細な報告であつたことがしのばれるのであります。當時その元老院を熱狂させ、お祭り騒ぎまでさせたこの報告書が間もなくガリヤ戦記にとつて代られてゐるところを見ますと、此説には看過し得ぬ要素がある様に考へられます。詳細であるとは言へ戦時報告であつた *epistulae* に土木事業の説明や、ゲルマニヤ及びブリタニヤ等に於ける風俗習慣の記事を加へて世に出したと言ふことは如何にもありさうなことであります。ケーザルの記事そのものが終始一貫した報告書でありますところから見ましても、報告書として當時最も重大なものであつた元老院への *epistulae* を骨子として他の細い報告書を之に説明的に附加したと見るこの立場は誠に穩當なもの、様に考へられるのであります。それにまたヒルチウスの物語る事

實、即ちケーザルが如何にも速かに而も容易に之を書上げたと言ふ記事も、もし元老院への *epistulae* に序文、註句、細説を加へたと言ふ仕事であるならばケーザルの天才を以てすれば、さして至難な事ではなからうかと考へます。ケーザルが之を書いた目的と致しまして直接吾人の有つ最も有力な材料はキケロの意見と更に之を裏付けてゐるヒルチウスの言葉であります。キケロの意見によりますと、之は歴史では無い、之は歴史家にガリヤ戦争の材料を與へる爲に書かれた書物であるしかしながら之は餘りに巧みに書かれてゐる、之を材料にガリヤ戦争史を書かうと言ふ様な大膽な男は恐らくゐまい、と言ふのであります。之はキケロがブルツスに語つた意見 (*Brutus. LXXV.*) で、ヒルチウスは恐らくその意見をそつくり借りて自分の序文にのせたのでありませう。しかしヒルチウスは之がローマ全體の一致した見解となつてゐると語つて居ります。誠にキケロの言ふ如く

此書は歴史ではありません。と申しますのは此書は歴史の書たるに必要な要素即ち筆者の批判、意見を缺いて居るのであります。しかしながら他面ケーザルが自己の立場から事件を解釋したり、説明したりしてくれなかつた事が、此書を一層色彩の無いものたらしめると同時に、その歴史的價値を極めて高いものにしてゐるのであります。即ち此書はケーザルが信用してゐた部下からの報告を處理してまとめた一つの報告書であつた様に思はれます。そして事實、報告書の形をして居るのであります。私一個の考へから致しますればガリヤ戦記の製作年代を *c.1.B.C.* とする一般説は少くともこの穩當な見解によつて緩和される必要がある様に思はれるのであります。しかしながらモンゼンの辨明説を排し、あまつさへこの報告書説をとつた立場と言ふものは、では何が故に多忙な時をおしてケーザルが之を書いたのであらうかと言ふ動機の問題に觸れて行かなければなりません。そ

ガリヤ戦記の製作年代に就いて(近山)

れについてポアシエ *Poisier* は次の如き意見を吐きました。「此書は勿論ローマ人が彼の勝利の記念を忘れざらんが爲でもあつたが、更にもう一つの様な事情の許に生れたものとも考へられる。彼の陣中には文學に秀でたものが多かつたが、ケーザルは彼等を遙かに抽んでゐた。彼はもと／＼何う言ふことが大衆を感嘆せしめるかを、よくわきまへてゐた。それ故、行軍の馬上で二冊の文法書 *De Analogia* を書いたり、詩を作つたりした。またキケロと親しき交りをむすぶにとめたのも同じ理由からである。此度も此書を陣中で草するにあたり極めて速に書くことによつて見てゐる仲間達を驚嘆、感服させたのであつた」と言つて居ります。またシャルパンチエ *Charpentier* も言ふ如く、彼は之を記すにあたり全く利害成が無かつたわけでは無いと思はれます。勿論彼が之を書いたのは世人の賞讃と畏敬とを買はんが爲であつたのであります。しかしながらキケロの手紙

容的なものになつて行かなければならぬのであります。

からも推察し得る如く、ケーザルのガリヤに於ける勝利はローマ人にとつて賞讃の的であつたのみならず、一つの驚異でもありました。と言ふのは之は單に征服であつたに止まらず、新世界の發見であつたからであります。それと同時に又それは當時行き詰つてゐた社會に對する唯一の活路でありました。ローマ帝國の建設に確かになければならなかつたものはガリヤ戦争であつたと思ひます。ガリヤ戦記が單に一つの報告書でありながら待望されて世に出で賞讃と畏敬とを浴びた理由は此處にあるものと推察されるのであります。そして其にはガリヤ戦争そのもの、社會的意義が問題となつてくるのであります。從來ローマ史の研究者から閑却されがちであつたガリヤ戦争の社會的重要性を説明して、之が單なる英雄の野望から生れた征服事業ではなかつたことを證明しなければならぬのであります。そして問題は此書の製作年代如何の如き形式的主题から離れまして一層内